

若 返 へ り 「天 界」

われ等の「天界」生れて茲に正に十年。また昔しの生々しい姿に若返らうとしてゐる。しかしながら、時代は昭和だ。何から何までが大正時代の姿に立ち歸るのではない。ポイント字の横組み左書きの、百パーセント現代的な若返りである。

表紙から、フロントから、中身のあちこちに見える氣のきいたカットを先づ御覽願ひたい。之れは皆われ等の畫伯高島三郎氏の厚意である。

次に、久しぶりで現はれ出でたる口繪寫眞に御眼を止められたい。本會最初の名譽會員本山翁が去る十月初旬の名月の夕、賑々しく花山を訪ねられた時の景況である。此の夕、主客合して十數名の、人の顔と、だんごの顔と、どちらがうまさうに見えますか!?

若返り天界の、最初の記事が「愛すべきエロス」の星物語りなのも嬉しい。何も、わざわざこんなプログラムに作り上げたのではないのだが、星の方が氣を好かせて、ちょうど今此の若返り號に書かねばならないやうな時機に、はるばると、めぐり合はせて來たのだ。「友遠方より來る」のゆかりだ、歓迎せずには居られない。今から約半年の間、全世界と共に吾等はエロスと遊ぼう！（但し、けがららしい地上世界のエロチシズムはマツピラマツピラ!!）

秋田の藤原氏の珍しい流星に關するスケッチと報告は、見るべき、よむべきものの一つである。過ぎし大正時代に比べて、昭和の今は我が國內だけでも、流星の觀測者が非常に増した。従つて、見られる流星の数も増した。しかし、どうしたことか、外國の新誌に常々見るやうな特異な火球や大流星の觀測報告が少ない。しかし、日本にだけ此の種の天體が見えないわけは決して無いのだ。熱心家の努力を望みます。

觀測部の各課は相變らず賑やかである。天象欄も、近く稻葉少尉殿の歸山によつて一段と光彩を増すことと豫期される。

讀者よ、次號を待たれよ！ 又、其の次號を!!